日本中国学会第六十六回大会プログラム

I 哲学・思想部会

十月十一日(土)午前

I- 1 銀雀山漢墓竹簡残簡の整理についての一考察 (十時~十時三十分)

石井真美子(立命館大学)

司会 谷中 信一(日本女子大学)

I- 2 三垣分類の形成と天市の位置づけ (十時三十分~十一時)

前原あやの(関西大学非常勤講師)

司会 南澤 良彦(九州大学)

I- 3 『淮南子』の太一―雑家思想の展開― (十一時~十一時三十分)

髙田哲太郎

司会 有馬 卓也(広島大学)

十月十二日(日)午前

I- 4 王弼の始終論 (九時三十分~十時)

趙 ウニル(京都大学大学院)

司会 辛 賢(大阪大学)

I- 5 葛洪所撰醫書考 (十時~十時三十分)

多田 伊織(京都大学人文科学研究所非常勤講師)

司会 大形 徹(大阪府立大学)

I- 6 敦煌本『壇経』古層と神会 (十時三十分~十一時)

古勝 亮(京都大学非常勤講師)

司会 小川 隆(駒澤大学)

I- 7 王安石学派の礼学思想 (十一時~十一時三十分)

梶田 祥嗣(早稲田大学大学院)

司会 吾妻 重二(関西大学)

I- 8 蘇軾の『尚書』学について (十一時三十分~十二時)

陳 佑真(京都大学大学院)

司会 土田健次郎(早稲田大学)

十月十二日(日)午後

I- 9 『困學紀聞』にみる清議の意義と元朝下の王應麟 (十三時三十分~十四時)

松葉久美子(京都大学大学院)

司会 三浦 秀一(東北大学)

I-10 許三礼の海昌講学と黄宗羲「五経講義」 (十四時~十四時三十分)

新田 元規(徳島大学)

司会 伊東 貴之(国際日本文化研究センター)

II 文学・語学部会

十月十一日(土)午前

II- 1 『荘子』の寓話における演出的表現について (十時~十時三十分)

鈴木 達明(大谷大学非常勤講師)

司会 西上 勝(山形大学)

II- 2 漢代における羿伝承の演変 (十時三十分~十一時)

雁木 誠(九州大学大学院)

司会 谷口 洋(奈良女子大学)

II- 3 中國の古典目錄學に現れた「左圖右書」 (十一時~十一時三十分)

高 仁徳(韓国・延世大学)

司会 平田 昌司(京都大学)

十月十二日(日)午前

II- 4 王績「獨坐」詩と「自贈答」詩に於ける阮籍・陶淵明受容の在り方 ―思慕と比擬を超えて― (九時三十分~十時)

加藤 文彬(筑波大学大学院)

司会 川合 康三(日本中国学会理事長)

II- 5 韓愈の「琴操」十首について (十時~十時三十分)

長谷川 慎(大谷大学非常勤講師)

司会 川合 康三(日本中国学会理事長)

II- 6 碧血の系譜―李賀詩に見る素材の自在性― (十時三十分~十一時)

小田 健太(筑波大学大学院)

司会 詹 満江(杏林大学)

II- 7 『夷堅志乙志』の原本について―洪邁の改作経緯に着目して― (十一時~十一時三十分)

潘 超(九州大学大学院)

司会 大塚 秀高(埼玉大学)

II- 8 明刊本《楊家将演義》小説のプロット構成とその配列 ―《北宋志傳》と《楊家府傳》の二系統をその対比対象に― (十一時三十分~十二時)

平原 真紀(東京外国語大学大学院)

司会 岡崎 由美(早稲田大学)

十月十二日(日)午後

II- 9 毛宗崗本『三国志演義』における女性の忠 (十三時三十分~十四時)

仙石 知子(日本学術振興会特別研究員)

司会 長尾 直茂(上智大学)

II- 10 〝清宮珍寶㾓美圖〟に関する報告 ーとある『金瓶梅』挿画の背景と現時点での版本を中心にー (十四時~十四時三十分)

上 なつき(京都大学大学院)

司会 井上 泰山(関西大学)

十月十二日(日)午前

II- 11 丁玲作品における同性愛ー「暑假中」を中心にー (十時三十分~十一時)

松倉 梨恵(慶應義塾大学大学院)

司会 牧野 格子(國學院大学)

II- 12「村上チルドレン」から「村上ファッション」へ、中国「70後」・「80後」 作家群の変貌ー衛慧、安妮宝貝、郭敬明の村上春樹受容を中心にー (十一時~十一時三十分)

徐 子怡(東京大学大学院)

司会 白水 紀子(横浜国立大学)

II- 13 中韓両国における村上春樹文学翻訳版本の比較研究 ー『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を中心に (十一時三十分~十二時)

権 慧(東京大学大学院)

司会 白水 紀子(横浜国立大学)

十月十二日(日)午後

II- 14 修練者(ノヴィズ)としての少年ー郭敬明における岩井俊二『リリイ・シュシュのすべて』の受容を中心に (十三時三十分~十四時)

張 瑤(東京大学大学院)

司会 好並 晶(近畿大学)

II- 15 郭敬明と韓寒が代表する「八〇後」作家の映画進出について (十四時~十四時三十分)

楊 冠穹(東京大学大学院)

司会 好並 晶(近畿大学)

III 日本漢文部会

十月十一日(土)午前

III- 1 唐『恵文太子集』の伝来について (十時~十時三十分)

劉 潔(九州大学大学院)

司会 後藤 昭雄(成城大学)

III- 2 黄庭堅抄物「演雅」の解釋について (十時三十分~十一時)

大島絵莉香(名古屋大学大学院)

司会 堀川 貴司(慶應義塾大学)

III- 3 森春濤の秋柳次韻詩 (十一時~十一時三十分)

陳 文佳(名古屋大学大学院)

司会 市川 桃子(明海大学)

十月十二日(日)午前

III- 4 『和解女四書』における男女観について−東アジアにおける女四書解釈との比較から (九時三十分~十時)

鬼頭 孝佳(名古屋大学大学院)

司会 野村 鮎子(奈良女子大学)

III- 5 『左氏会箋』における『左伝纘考』人物評の受容 (十時~十時三十分)

竹内 航治(名古屋大学大学院)

司会 野間 文史(二松学舎大学)

特別講演・シンポジウム

第一部 特別講演 十月十一日(土)十三時五十分~十五時十分

大陸、日本語として

リービ 英雄 氏

司会 藤井 省三(東京大学)

第二部 シンポジウム 十月十一日(土)十五時二十分~十六時五十分

中国とはなにか―言葉と権力

金 文京(京都大学)
小島 毅(東京大学)
濱田 麻矢(神戸大学)
司会 浅見 洋二(大阪大学)

*注意事項 入場券(当日配布する封筒に同封)が必要です。参加希望者は必ず事前に大会参加費をお振り込みください。また、一時退出される場合も必ず入場券をお持ちください。ご提示ない場合は入場をお断りすることがございます。

発表要旨

I 哲学・思想部会

I . 1 銀雀山漢墓竹簡残簡の整理についての一考察 石井 真美子(立命館大学)

銀雀山漢墓竹簡は、一九七二年に山東省臨沂県(現在の臨沂市)の前漢墓から出土した竹簡である。発掘された二つの墓は前漢 前期のもので、一号墓から約四千九百四十二枚の竹簡が、二号墓からは「漢武帝元光元年暦譜」三十二枚の竹簡が発見された。この竹簡は整理され、佚篇を含む『孫子兵法』『孫臏兵法』『尉繚子』『晏子』『六韜』『守法守令等十三篇』の図版・摹本及び釈文を掲 載した大型本『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』(文物出版社)が一九八五年に出版された。続編の〔貳〕は長い間未刊となっていたが、二〇一〇年になってようやく出版

された。〔貳〕に収録されているのは佚書七十五篇で、「論政論兵之類」五十篇、「陰陽時令占候之類」十二篇、「其他之類」十三篇に分類されている。しかし、残闕が著しく、篇題と思われる語句が書かれた一簡のみという篇も あり、未分類の残簡の中にもそれらの篇に属するものがあると思われる。その残簡を収録するという〔参〕については、現在のところいつ出版されるのか不明である。一方、一九八五年に出版された『銀雀山漢簡釈文』(呉九龍、文物出版社)があり、これはすべ ての竹簡の釈文のみを活字で整理番号順に掲載したもので、現在に至るまで残簡の公開資料としては唯一のものである。同書の分 類にしたがって算出すると、未分類の残簡は約千九百枚も存在し、中には三十字以上の文字が書かれたものもある。発表者はこの銀雀山漢簡について、これまで『銀雀山漢簡釈文』と大型本〔壹〕〔貳〕を検証し両者間に齟齬があることを指摘、また異文・佚 文の多い『六韜』の諸テキストと残簡との関連を考察してきた。今回は字数の多い一部の残簡について、その内容を整理して文形 や語句から同じ篇に属すると思われるものを分け、さらに既に分類された諸書の一部・または異文である可能性について考察する。

I . 2 三垣分類の形成と天市の位置づけ

前原 あやの(関西大学非常勤講師)

中国の主な星座分類として、『史記』天官書の五宮分類、『開元占経』に代表される三家分類(石氏、甘氏、巫咸)、『宋史』天文志や「歩天歌」の三垣分類(紫微垣、太微垣、天市垣)が知られている。これらの分類は、さらに二十八宿や中外官の区分が組み合わさった上で形成される。

これらの星座分類の相互関係についてはこれまでほとんど論じられず、大崎正次『中国の星座の歴史』(雄山閣、一九八七年)では時期ごとに 五宮(官)→ 三家 → 中宮・二十八舎(宿)・外官 → 三垣・二十八舎(宿)という変遷過程を描くが、各文献の分類 __を追っていくと、星座の位置にもとづく五宮・三垣分類と、三人の人物による星座を集成した三家分類には大きな相違があり、星 座の分類は大きく二つの流れがあったと考えられる。

本発表ではこのうち、五宮分類から三垣分類へと展開する分類の流れを検討する。『史記』天官書とそれを継承した『漢書』天 文志以降、初唐の李淳風が『乙巳占』、『隋書』天文志、『晋書』天文志を編纂するまでの間の時期は、まとまった天文書が現存せず、星座をどのように分類したかが明らかではない。空白の後漢~隋の星座に関する個別の記述を整理し、当時の星座分類の実態をとらえた上で、どのように五宮から三垣へと分類が変遷したかを考えたい。

変遷の検討において、特に三垣分類のうち、天市がなぜ三垣の一つと考えられるようになったのかについても考察する。紫微、太 微が天子の居所や宮廷に対応するのに対し、天市は市という、天子と直接には関わらない異質の存在である。星座分類における天 市の位置づけには、当時の人々の社会意識が影響していると考えられる。

I . 3 『淮南子』の太一―雑家思想の展開―

髙田 哲太郎

『漢書芸文志』で雑家(国体論)に分類される『淮南子』は、日本では道家という前提の下に研究されてきた。この前提は武内 義雄に拠る。武内氏は政治に対し消極的な『荘子』を道家

の主流派とみなす。そして『管子』を雑駁として道家から除外し、『荘子』を多く引く『淮南子』を道家とする事で、荘子の思想が『淮南子』を経由し六朝の玄学として展開したという仮説を提示した。金谷治『淮南子の研究』を代表とする戦後の研究は、すべてこの視点で進められている。

しかし、『管子』では無形の道が展開し、天では太陽となり、人では心として具現し、更に心を通じことばとして分節する。そして聖人はこのことばを扱う心術で人心を一にし、天子を中心にした概念世界を確立し天道に従い牧民する。故に『漢志』の分類 通り道家の積極派と見なせる。(拙論「『管子』の「道」について」『中国研究集刊』第 53 号 2011)この無形の道の展開という思考は『呂氏春秋』に引き継がれる。

『呂氏春秋』は諸家の根源、即ち儒家、墨家の天、道家の道をすべて太一の解釈とし、太一を核とする道、即ち天が無形から有 形に現象し、天地万物を成立させ、人の内に天として備わるとする。そして聖人の天符を持つ我は内なる天に従い外なる天にすべてを概念化する事で勝ち、一天下、一国家、一天子体制を確立する統一論を展開する。その根拠は「天地萬物、一人之身也。」(有始)である。(拙論「『呂氏春秋』の天」『中国研究集刊』第 57 号 2013)

『淮南子』は同じく太一を道の背後に置き、無形の道は有形の天道、地道、人道と展開し、聖人の性、天心、即ちすべての判断 の基準となる聖人の我として展開する。その支配の根拠も「天地宇宙、一人之身也。」(本經訓)と同一である。 そこで本発表では『淮南子』が『呂氏春秋』と同じ思想構造を持ち、それが漢の天下維持の論理として展開された事を文献的に 実証したい。

Ⅰ－４　王弼の始終論

趙　ウニル(京都大学大学院)

王弼の生成論は、これまで「有無」の観点から論じられることが多かったが、本発表ではこれを「始終」の観点から論じ、王弼生成論の新たな側面を提示したい。

王弼の生成論は、「有無」「本末」「始終」などの概念をもって構成されているが、その関係は複雑であり、その内容構造はつかみにくい。これまで中心に据えられることのなかった「始終」を中心として考察すると、その生成論の持つ動的な構造をより明らかにできるのではないかと発表者は考えている。

「始終」という概念は、王弼以前の経書や諸子書の中で様々に論じられてきた重要概念であり、王弼は『周易』と『老子』に注釈する際に、この伝統的な「始終」の概念を用いている。王弼の『周易』解釈における始終論は、『周易』繫辭傳が「始」「終」を易卦の初爻・上爻と結び付ける枠組みを基本としており、『周易』爻辭を解釈する際に、王弼は全面的にこの枠組みを用いている。一方『老子』第一章には「始」「終」の対はないが、王弼注は「始物の妙」「終物の徼」と説いており、「始」「終」を強く意識している。本発表では、『周易』『老子』各々における始終論を検討することを通じて、王弼思想の核心である始終論の全体像を明らかにしたい。

さらに、「始」から「終」への働きについて、王弼が如何に考えたかについての考察も欠かせない。それに関しては、『周易注』では復卦の解釈、『老子注』では第一章の「歸終」、第二十八章の「反終」などの注釈が重要である。これらの「復」「反」「歸」の概念は、『周易』と『老子』をつなぐ概念であるが、各々の注釈の共通点と差異を明らかにしたい。

本発表においては、王弼の始終論が伝統的な始終論をどのように継承し、どこに王弼の特色

があるのか、そして『周易』および『老子』の注釈において共通して用いられる「始」「終」や「復」「反」の概念は、どのように王弼生成論の全体的な論理を構成しているのかを考察する。

Ｉ－５　葛洪所撰醫書考

多田　伊織（京都大学人文科学研究所非常勤講師）

醫書は實用書であるが故に、臨床の現場で内容を常に吟味され、書承の段階で増廣されたり、刪除を蒙る運命にある。その點で、經書や史書、思想書、文學作品が、できうる限りオリジナルに近い方向で書承されるとアプリオリに考えられているのとは異なる。

晉の葛洪は、『抱朴子』内篇において、『玉函方』百卷とそれを三卷に要約した『肘後救卒方』（『肘後方』）の二醫書を撰述したと明言する。前者は夙に佚し、後者は梁の陶弘景が増補して全百一條（『補闕肘後百一方』）としてからは、葛洪の原撰部分と陶弘景の増補部分は朱墨に色分けして鈔寫されたことが知られている。しかし、北宋以降、版本の時代になると、原本と増補部分の區別は失われた。今本『肘後備急方』は、金の楊用道の再増補を受けたもので、葛洪の原撰部を區別することは難しい。

本發表では、唐代までに成立した他醫書に引用される「葛氏方」『肘後方』等葛洪原撰とされる醫方に着目、『千金方』『外臺祕要方』『醫心方』等からできる限り廣い範圍で輯佚を行った。この内、『醫心方』は、北宋の校正醫書局による改訂を經ていない、遣唐使將來の原本の系統から引用されている點が重要である。藤原佐世『日本國見在書目錄』には、「葛氏肘後方十（卷）、葛氏肘後方三（卷）陶弘景撰、葛氏百方九（卷）、葛氏方九（卷）」の四種が著錄されている。管見では、宋本『千金方』『外臺祕要方』等所引の「葛氏方」『肘後備急方』は校正醫書局の校訂によって、整合性を持たされている。從って、『醫心方』から得られるヴァリアントは、唐代の「葛氏方」『肘後備急方』を反映している可能性が高い。

こうして得られた「葛氏方」『肘後方』等葛洪原撰とされる醫書の諸條を現行本『肘後方』と比較し、『肘後方』とは異なる諸條を拔き出し「葛氏方」と呼ばれている醫書の性格について檢討を行う。更に、なぜそれらの醫方が「葛氏方」とされたかを考察する。

Ｉ－６　敦煌本『壇経』古層と神会

古勝　亮（京都大学非常勤講師）

敦煌本『壇経』に関しては、その発見以来、国内外を問わず多くの研究が行われてきた。発表者は、敦煌本『壇経』の研究に関し、中でも、テキストにみられる数次の改訂の痕跡、テキストにおける新旧の層の辨別、神会およびその一派がテキスト改訂の際に及ぼした思想的影響、それらの諸論点を包括した敦煌本『壇経』から想定されるテキスト形成史の推定が、特に重要な問題であると考える。

上記の問題を考える際に、敦煌本『壇経』における表現とそこに説かれる思想が、神会に関連する著作である敦煌本『壇語』・『神会語録』と極めて類似していることは、胡適が指摘して以来、当該研究において大きな問題とされ、宇井伯寿・銭穆・柳田聖山・印順・小川隆・伊吹敦・古賀英彦・松岡由香子の諸氏が論じてきた。但し、従来の研究において、一部を除き、敦煌本『壇経』と神会関連著作とに見える表現の類似をもって、直ちにそれらを『壇経』に与えた神会および神会派の影響であると考えてしまった点は、再考すべき問題を含んでいると思われる。

発表者は、敦煌本『壇経』の古層と考えられる前半部と神会関連著作に見える類似した表現を厳密に検討した結果、その中に、独立した二つの異なる規範が見られる場合があることに注目している。例えば、「浄」という語の用法を検討してみると、前者では多くは「自性」「性」を形容して用いられるが、後者ではそのような用法は稀で、主に「心」と結びついて用いられる。これは単に語法の相違ということにとどまらず、両者の思想的差異を明確に表すものと考えられる。このような差異を具体的に検討することによって、両者の相互的な関係と、それぞれの思想的特質について、客観的に論じることが可能となり、これにより、『壇経』古層の思想と神会思想とを辨別する際に何を客観的な基準とするかという従来の研究における懸案に対して、一つの解を提示することができるのではないかと考える。

Ｉ－７　王安石学派の礼学思想

梶田　祥嗣（早稲田大学大学院）

王安石学派（以下、王学）の思想的特徴として、一般に「道徳性命之学」が挙げられることが多い。その背景には、安石没後、蔡卞や門下の林自らが「道徳性命之学」を「国是」に掲げて紹述し、さらにそれを糾弾した陳瓘等も王学の精髄を「性命之理」と解釈した結果、「王学＝道徳性命之学」というイメージが定着したという経緯がある。その後、陳瓘と同郷の楊時やこの二人を師とした陳淵によって更なる王学批判が展開されたが、その内実は猶も道徳性命方面を中心とするものであった。

一方で、王学の根幹は制度的礼学にある、と看破したのが陳師錫である。その観点を敷衍して先の王学批判を再検証した朱熹は、王学の思想的枠組が「道徳性命」と「刑名度数」の二層構造からなることを指摘する。すなわち朱熹によって初めて、王学の道徳心性論と制度的礼論の両面が議論の俎上に載せられたのである。実際、王学の礼系経解は南宋においても一定の勢力を保持しており、例えば魏了翁も、道学系の『礼記』注は王学系のそれに比べて圧倒的に層が薄いことを嘆いている。

以上の経緯を踏まえ、本発表では、王学の学派的特徴とその核である礼学思想の検証を試みる。王安石『周礼義』自体の制度的側面については既に先行研究によってほぼ解明済みであるものの、『周礼義』と門下の経解との関係については殆ど研究が進んでいない。しかし発表者は、陳祥道『礼書』の記述と思想が『周礼義』に準拠しており、両書が相互補完的な関係にあることを見出した。この一例からは、安石とその門下の経解を関連付けて分析する必要があること、そして王学は決して名物方面を疎かにしていたわけではなく、むしろこれを政治の具として積極的に利用しようとしていたことが理解できるのである。また門下の経解のみならず、従来全く顧みられなかった黄裳（字冕仲）をも「広義の王学」として取り上げ、王学の学派的特徴を解明する一助としたい。

Ｉ－８　蘇軾の『尚書』学について

陳　佑真（京都大学大学院）

『尚書』に対する歴代の注釈は膨大な数にのぼるが、偽孔伝及び『尚書正義』、蔡沈『書集伝』はそのうち最も著名で影響力の大きいものということができよう。しかし、漢晋訓詁学及び六朝隋唐義疏学の成果である前者と、宋代経学の成果である後者とは経学著作としてその性質を大いに異にするものである。前人の成果を広く吸収し、新たな解釈を生み出すという伝統学術の特性に鑑みるに、我々はこの所謂古注と新注との間にどのような経学上の変化が起きた

のかということを考えるべきであろう。皮錫瑞が「経学変古時代」と名付けたように、宋代は経学史上多大な変化を生じた時代であり、この時代の経学は特に近年研究の進展が著しい分野であるが、発表者は、『尚書』学に於いて『尚書正義』・『書集伝』という二つの権威的な注釈書の間に位置するこの時代の重要な経学著作として、蘇軾『東坡書伝』に注目している。『東坡書伝』についてはテクスト整理や解釈内容など様々な方向から研究が進みつつあるが、その中で発表者は、蘇軾の『尚書』解釈について、蘇軾自身の思想との関連という観点から考えた結果、経解の恤民性や現実政治との関連など、いくつかの『東坡書伝』に特徴的な要素を見出すことができた。また、このように特徴的な注釈書である『東坡書伝』は、政治上に対立関係にある程頤の流れを汲む朱熹門下に於いても高い評価を受けており、南宋以降の蔡沈や朱祖義などが蘇軾の説の強い影響を受けながらその解釈を取捨選択して自身の著作に取り入れていることも見出せる。このような状況を踏まえ、『東坡書伝』に特徴的な要素とは何なのか、『東坡書伝』は経学の歴史上どのように位置づけられるのか、ということを明らかにしたい。

Ⅰ－９　『困學紀聞』にみる清議の意義と元朝下の王應麟

松葉久美子（京都大学大学院）

王應麟は、「二君に仕えない」という節義を持ち、宋の滅亡後は元朝に仕えず著述を行った。『困學紀聞』は、この時期に著されたものである。王應麟は『宋元學案』『宋季忠義録』には、滅亡後は杜門し著述に専念した人物として記されるが、その記述には、一つ触れられていない点がある。それは、王應麟が元朝の要請を受け碑文を作成したという事実である。王應麟の節義に基づいた元朝への不仕と、その碑文の作成は、矛盾する行為とみなされ、近年の王應麟研究には、元朝下の王應麟を変節と評価するものもある。しかしながら、このような後世の評価がある一方で、王應麟自身が、自らを「節を全うした遺民」であると語ったという資料も残っている。

ならば次のように考えられないであろうか。王應麟にとって碑文の作成とは、『宋季忠義録』が隠蔽すべき性格のものでも、変節にあたるものでもなく、「二君に仕えない」という王應麟の節義と両立しえたのではないか、ということである。つまり王應麟には、碑文の作成は節義に抵触する行為には当たらない、と考える根拠となる思想があったのではないだろうか。

では、王應麟は如何なる思想を持ち、不仕でありながら碑文を作成したのであろうか。元朝下の王應麟については、近年の王應麟研究においても言及されているが、そこでの議論には『困學紀聞』は用いられていない。そこで本発表では、王應麟自身が、碑文の作成は節義に抵触する行為には当たらないと考える根拠を、『困學紀聞』を用いて検討する。ここでは『困學紀聞』の中でも特に清議に関する議論を手掛かりとして考察する。そして、そこで明らかとなった王應麟の思想は、碑文に記された作成動機とも一致し、さらに、元朝下の王應麟が、士大夫として如何なる目的意識を持ち、また如何にあるべきと考えたかを示すものであることを論じてみたい。

Ⅰ－10　許三礼の海昌講学と黄宗羲「五経講義」

新田　元規（徳島大学）

康熙朝の道学官僚に数えられる許三礼は、経世致用の志向、家礼や象数易への関心、「告天」の実践など、同時代の思潮を雑多にとり込み、朱子学・陽明学といった括りにはおさまらない独自の学問を形成している。許三礼の主要な治績・学問活動の一つとして、浙江省海寧の知県

在任中(康熙十二～十九)に、講堂(海昌講院)を設けて講会を挙行したことが挙げられる。今日、彼の『天中許子政学合一集』にもとづいて、参加者、実施形式、論題など、海寧での講会の詳細を知ることができる。参加者の顔ぶれを見ると、杭州地区だけでなく、紹興・寧波からも多くの士人が集まっており、寧波からの参会者は、元来、甬上講経会に集っていた黄宗羲の門人である。黄宗羲自身もまた、許三礼の招聘を受けて数次にわたって参加し、主講をつとめている。

本報告では、許三礼が催したこの海昌講会の概要を紹介した上で、『天中許子政学合一集』に保存されている講義の内容を、黄宗羲の講義を中心に検討する。一連の講会の中でも、康熙十五年に実施された会については、五回の講義でとりあげられた全十五の論題が確認でき、許三礼の講義は問答形式で行った十五題すべてが「北山丙辰問答」に、黄宗羲・沈珩・仇兆鰲ら参会者の講義は「海昌講学会語」に、それぞれ収録されている。黄宗羲の著作中では、「経書の一節を解説して大義を引伸する」といった体裁の文章は少ないが、「海昌講学会語」には、彼の講義が五経それぞれに一題ずつ収められている(「泰卦講義」「七月流火講義」「洪範五皇極講義」「春王正月講義」「儒行講義」)。黄宗羲が、皇帝の経筵でもとりあげられる常套の諸論題について、どのように経義を説いているかを、許三礼や他の参会者の講義と対比しながら明らかにしたい。

Ⅱ文学・語学部会

Ⅱ－１　『荘子』の寓話における演出的表現について

鈴木　達明(大谷大学非常勤講師)

『荘子』の寓話は、発想の豊かさや優れた諧謔性など、その内容の面に注目されることが多いが、物語構造や修辞においても他の諸子とは異なる特徴をもっている。今回注目するのは、対話を中心とする寓話の中で、人物のふるまいや心情などの描写に用いられる演出的な表現である。

古代中国の散文において、記事よりも記言の文が先行して発達したことは先行研究が既に指摘するところである。『論語』や『孟子』のような人物の言行録は当然のことながら、『左伝』のように事件を記すことを主体とする文献においても、直接話法による談話がその多くを占めている。それらの談話の中には、単に「某曰く」や「対えて曰く」のみでなく、「喟然として歎じて曰く」や「莞爾として笑いて曰く」のように、発言者の態度・心情をあわせて表現するものや、聞き手の反応を描写するものが存在する。

このような談話に伴う演出的な表現は、文献ごとの差違はあるものの、たとえば『史記』などの前漢文献と比べて、先秦文献での使用は抑制的であり、使用される場合でも、おおむね定型的な紋切り型の表現であって、場面や感情を生き生きと描き出す効果を発揮していると言える例は限られている。

ところが、『荘子』における同種の演出的な表現は、その量のみならず種類の多さや独自性においても突出しており、同じく豊富な寓話を含む『韓非子』などと比べても、その多様性は際立っている。

本発表では、同時代の思想文献・歴史文献に含まれる寓話や対話文との比較を通して、『荘子』の演出的表現の特性を分析し、それがいかなる背景を持つのか、また文学史における修辞の発展の中で、いかに位置づけることができるのかについて考察したい。

Ⅱ－２　漢代における羿伝承の演変

雁木 誠（九州大学大学院）

中国古代神話に登場する羿（后羿）は、『春秋左氏伝』襄公四年、『楚辞』離騒においては狩猟に耽り民政を省みない結果、その臣下に誅殺される暗君として登場するが、一方『淮南子』本経訓、『山海経』海内経においては、天より降されて十個の太陽を射、地上にはびこった種々の害獣を駆逐して民の困窮を救った英雄として描かれている。森三樹三郎（『支那古代神話』一九四四年）、小川環樹（「神話より小説へ―中国の楽園表象」一九五九年）などの先行研究においては、羿にまつわるこの相容れない二つの性格は、最終的には矛盾しないものとして結論づけられている。確かに、両者の羿には弓術の名手という共通した技能が存在し、また田猟に耽ること、及び害獣を駆除するという行動は共に狩猟にまつわる一連の故事伝承として定義することが可能である。しかし、先秦時代の伝承である『春秋左氏伝』『楚辞』離騒において暗君として記され、殆ど顧みられることの無かった羿が、それ以降の『淮南子』『山海経』において、先に述べるような英雄としての性格が顕在化していったのはなぜか。この、先秦から漢代にかけての羿伝承の演変の過程は、それらの伝承を記録してゆく文献の意図、とりわけ、漢代以前の伝承を所収記事に含むこととなる後漢から六朝期にかけての志怪の発生という問題にも、一つの答えとなるものを出しうるように思われる。

本発表では、羿伝承の演変に沿って、彼に付随する「弓術」や「狩猟」という二つの要素に着目し、その各時代ごとの意義付けの変化について検討を加えていくとともに、古代中国の神話伝承の変遷の一端について言及し、さらには、それらが記録されることとなる後漢の諸文献、六朝志怪などに収録される記事との関係性についても考察を加えたい。

Ⅱ－３　中國の古典目錄學に現れた「左圖右書」

高　仁德（韓国・延世大学校）

中國の出版文化史で書籍の中に挿繪が本格的に挿入され始めたのは印刷術が發達して、テキストの複製が可能となった唐末、特に宋代以降だと言えるが、中國の讀書史ではそれ以前にも文字と一緒に繪を重視して來た。それを象徴的に示してくれるのは、『易經』の卦象だと言える。繪を重視した傳統はまた、本という意味で使用されて來た單語である「圖書」と、「左圖右書」という成語にもよく現れている。

このような傳統は、古代中國の目錄學にも反映されている。すなわち、古典時代の書誌目錄の中で、本の中に繪が入っていることを示してくれる「圖」のような文字が入っている本の名前を見つけることができ、また書誌目錄によっては、本の分類項目に繪に關聯する項目を立て、繪を重要視していることを反映したりした。

各時代の代表的な書誌目錄は當時の讀書生活を一目瞭然に示してくれる良い材料だと言え、このような書誌目錄についての考察は、その當時の人々の讀書生活に繪が關連した樣相を把握することができる有效な方法になるだろう。それで本稿では、『漢書・藝文志』、「圖譜志」を本の分類項目に掲げた王儉（452～489）の『七志』、「圖」と「譜」を重視した鄭樵（1104～1162）の『通志・藝文略』、「譜錄類」を書誌分類項目に掲げた尤袤（1127～1202）の『遂初堂書目』と『四庫全書總目』など、特に繪と關連して主要だと認められる中國の古代書誌目錄を考察して、「圖」、「譜」、「圖譜」、「譜錄」などの語彙がどのような本を指しているかその含意と、各目錄に現れた當時の人の繪についての認識を調べようとする。特に古代中國の「圖」には、形を描いた一般的な「繪」のほか、「文字」で構成された圖表や年代表なども含まれている場合が多

いが、このような事實に着目して上記の語彙を考察することにより、中國人たちの繪と文字に對する認識についても調べようとする。

Ⅱ－４　王績「獨坐」詩と「自贈答」詩に於ける阮籍・陶淵明受容の在り方
――思慕と比擬を超えて――

加藤　文彬（筑波大学大学院）

王績の詩文中には、許由をはじめ劉伶・阮籍・陶淵明等、古の隠士や高士の姿が多く出現し、その数は五十を超える。先行研究の多くは、その姿が思慕の対象として描かれているとする。実際に「散腰追阮籍、招手喚劉伶。鬲架窺前空、未餘几小瓶」（「春園興後」詩）、「嘗愛陶淵明、酌醴焚枯魚。嘗學公孫弘、策杖牧羣豬」（「薛記室收過莊見尋率題古意以贈」詩）等、思慕を表明するものは散見される。一方で古の隠士・高士の姿が、単なる思慕の対象に留まらないものも存在している。それは高木重俊氏が「王績の文学――寒郷の春」で言及するが如き「比擬」の対象、すなわち自己と同一化していく対象としての姿である。

しかしながら王績詩中には、思慕や比擬という枠組みを超え、古の隠士・高士と同一化された自己に満足しえないもう一人の自己が存在している様に思われる。本発表では、先ず古の隠士・高士と自己とが、どの様に結びついていくのかを「獨坐」詩に即して明らかにし、その上で思慕や比擬に収まりきることのないもう一人の自己が、「自贈答」詩によって発見されていくということを明らかにする。王績詩文に於ける阮籍・陶淵明受容を多角的かつ複層的に究明することを通じ、初唐期に於ける陶淵明受容の一端を明らかにしたい。

Ⅱ－５　韓愈の「琴操」十首について

長谷川　慎（大谷大学非常勤講師）

韓愈の楽府の作品として「琴操」十首がある。文王や孔子など古の聖賢が原作者とされ、韓愈はその聖賢たちの口を借り、歌辞を作った。後の琴家は、十首とも琴の弾奏に合わせ歌唱されたと肯定的に受け止める。少なくとも宋以後譜が付せられたと見做され、明の謝琳『太古遺音』ほか、明清期の琴譜に韓愈の辞を以て古曲として採用する。琴曲歌辞として独歩し、一つの完成形と見てよい。しかしながら、「琴操」十首は、その制作の時期も含め、依然問題とすべき点も少なくない。研究者の多くは、南北朝宋の謝希逸『琴論』に「憂愁而作、命之曰操、言窮則獨善其身而不失其操也。」とある点などを踏まえ、「操」の本分を「憂愁」にあるとし、韓愈の最も憂愁する元和十四年（八一九）の潮州流謫期の作と見る。確かに、「琴操」十首の其の五「拘幽操」に「嗚呼臣罪當誅兮」の句があり、「潮州刺史謝上表」の「萬死猶輕」と相似する。ただ、この一首を以て断ずるのは穏当ではない。また、「琴操」十首の取材元として後漢の蔡邕撰と伝わる『琴操』が挙げられる。『琴操』は最初期の琴曲の著録であり、四十七の古琴曲を収める。そのうち十二が「操」に相当し、韓愈の十首と同名の「操」のほか、「水仙操」、「懐陵操」を含む。韓愈にこの二首を欠く疑問も残る。これらの問題は、韓愈の復古の認識と併せ考察することにより、解答の一端を得られると考える。

本発表では「琴操」十首の中、特に其の二「猗蘭操」、其の九「別鶴操」を中心に、その制作背景に焦点をあてる。この二首を選ぶのは、唐代に実際に弾奏されていた琴曲のレパートリーとして確認しうることによる。また、宋の郭茂倩『樂府詩集』に「琴操」十首すべてを琴曲歌辞に分類し載せる。古楽府、新楽府ともに殆どの作品が音楽から切り離されて制作される当時において、「琴操」十首が如何に琴曲に配辞されたのか、唐代の古曲伝承や、楽府観などと

照らし合わせ、考究したい。

Ⅱ－６　碧血の系譜―李賀詩に見る素材の自在性―

小田　健太（筑波大学大学院）

李賀の代表作でもある「秋来」の「恨血千年土中碧」という句は、蜀の地で死んだ萇弘の血が三年の後に碧玉に変化したという碧血故事を踏まえている。碧血故事は『荘子』外物篇の「萇弘死于蜀、蔵其血三年而化為碧」という記述に由来するものであり、早くは左思の「蜀都賦」などに受容された。李賀は「秋来」以外の作品においてもさまざまな形で碧血故事を自作に取り入れている。例えば「楊生青花紫石硯歌」に「暗洒萇弘冷血痕」と詠じられているのは、詩題にいうところの「楊生」が所有していた硯の模様が、血痕のような深い緑の色合いをたたえていたことを比喩的に表現したものであり、同じ故事を受容した表現ではあっても、半永久的に消滅することなく継続する怨恨を象徴している「秋来」とは異なっている。「秋来」と「楊生青花紫石硯歌」の二首ほど明瞭ではないものの、碧血故事に発想を借りたと思しき詩句も複数ある。「金銅仙人辞漢歌」の「三十六宮土花碧」という句などがそうである。苔の青々とした様子を表わしていると解される下三字の表現の背後に碧血故事の影響を認める注釈は見当たらない。しかし、宋・郭祥正の「次韻元輿雨中見懐二首」〈其二〉に、「恨血千年変土花」と詠じられているのが、「秋来」と「金銅仙人辞漢歌」の句を組み合わせた表現となっていることからして、少なくとも一部の読者は両句の間に共通性を認めていたと考えられる。李賀は碧血故事の多様な側面に着目し、詩の素材としての可能性を模索しながら柔軟に作品に取り入れていたのである。

それでは、『荘子』を源流とする碧血故事を踏まえた表現はいかにして後世の作品に受容・継承されたのだろうか。また、碧血故事受容の系譜の中で、李賀はどのような位置を占めるのであろうか。さらには他の詩人と比較した場合に、彼の表現上の独自性はいかなる点に認められるであろうか。本発表は、以上の諸点について考察を加えるものである。

Ⅱ－７　『夷堅志乙志』の原本について―洪邁の改作経緯に着目して―

潘　超（九州大学大学院）

『夷堅志』は南宋の洪邁が編纂した志怪小説集であり、全書は三十二志に分かれる。洪邁の序文によると、乾道二年（１１６６）に三十二志の一志として『夷堅志乙志』（以下、『乙志』と称す）が會稽で刊行された後、若干の問題が指摘されたため、乾道八年（１１７２）に洪邁が會稽刻本を改訂し、贛地で出版した。その後、淳熙七年（１１８０）に洪邁が『夷堅志』の前四志（甲乙丙丁）を併せて建安で新たに刻本を上梓した。このように、刊行時期と刊行地により、『乙志』の版本系統を會稽本・贛本・建安本に分けることができる。元代の沈天佑が建安本の刻版を修正し、新たに印刷した版本は「宋刻元修本」と称される。現在の通行本である中華書局本の『乙志』の祖本はその「宋刻元修本」とされる。即ち、洪邁自身が編纂した三つの版本は建安本のみ後世に傳わっている。そのため、従来の研究において、南宋における諸本『乙志』の相違点、並びに洪邁が改作した原因についてはまだ考察されていない。

ところで、上海圖書館に所藏されている明鈔本『夷堅志』は明代の祝允明の自筆鈔本である。この鈔本は『乙志』の前三巻だけであるが、通行本と比べてみると異なる箇所が多い。張祝平氏は、この抄本と通行本との相違から、校勘・輯逸の価値が高いと指摘している。

ところが、発表者の調査によると、上海圖書館所藏明鈔本が通行本と異なる原因は、傳写と

印刷における相違だけでなく、それが『乙志』の初版本、即ち洪邁の改作を経ていない會稽本系統に属することが明らかになった。換言すれば、その明鈔本に『乙志』の改作前の原文が保存されているのである。

本発表では、上海圖書館所藏明鈔本と通行本の比較により、原本である會稽本『乙志』の特色を考察し、更に『乙志』に収録される「侠婦人」という小説の改作を通して、洪邁が『夷堅志乙志』を改作した経緯について検討したい。

Ⅱ－８　明刊本《楊家将演義》小説のプロット構成とその配列
―《北宋志傳》と《楊家府傳》の二系統をその対比対象に―

平原　真紀（東京外国語大学大学院）

現存する明代刊行の小説《楊家将演義》には、大別すると異なる二系統の板本が最古の物として確認されている。一つは作者不詳、一般に福建・建陽の書肆である熊大木編次として通用する『南北兩宋志傳』全百回中の後半五十回、《北宋志傳》（北宋傳・宋伝続集とも）。いま一つが同じく作者不詳、南京の下級文人である紀振倫校閲と題される五十八則本、『楊家府世代忠勇演義志傳』こと《楊家府傳》（楊家通俗演義、楊家府演義とも）である。

同名の長編白話小説に複数の板本が確認できる場合、その板本によって各プロットの構成や配列などに不統一が生じるのは、どの作品にも見られる現象である。また、そうした差異は、残存する板本の数に比例して大きくなるのが通常とされる。例えば、異本が多い事で知られている『水滸伝』や『西遊記』などはその典型で、旧本『水滸伝』で招安以降の全プロットが削除されている金聖嘆本や、明刊本『西遊記』で、他の板本には見られない唐三蔵の因縁めいた出世譚を有する朱本などは、夙に知られているところである。ただ、物語の骨格である筋立ては全板本が共通のものを有しており、これらの異本を総称し『水滸伝』、『西遊記』と称することにそれほどの不都合はないだろう。

しかし、明刊本《楊家将演義》小説に関しては、その様相は大きく異なっている。この二系統の板本は、それぞれ全く別のプロットを複数有し、その構成や配列、主要登場人物もまた然りである。一見、同一プロットのようだが、実は異なる主要人物が担う異なるプロットであったりと、物語の主要プロットにさえ共通しないものが存在する。今回の発表では、二系統の板本をそれぞれのプロット構成や配置に関して対比し差異を明白にした上で、他の長編白話小説と同様に《楊家将演義》小説として一括りにするには、その差異が非常に大きいという点について、新たな仮説と共に提示したい。

Ⅱ－９　毛宗崗本『三国志演義』における女性の忠

仙石　知子（日本学術振興会特別研究員）

『三国志演義』（以下、演義）は、義を敷衍する物語である。義という儒教の徳目は、忠義と並称されることが多い。しかし、毛宗崗批評『三国志演義』（以下、毛宗崗本）は、「義絶」関羽の表現の中で、忠を削除して、義を強調することが多かった。忠よりも義を優先する表現が見られるのである。また、『孝経注疏』で「百行の先」と位置づけられる孝は、時として忠と両立しない場合がある。演義が題材とする三国時代には、忠孝先後論争と呼ばれる、忠と孝が矛盾した場合にどちらを優先すべきかという議論が、曹魏の文帝の朝廷で行われていた。忠を強要しようとする曹丕に、邴原は憤然として孝の優先を貫く。この邴原の逸話を演義が収録することはない。それでは、演義は、こうした義や孝との関係性の中で、どのように忠を表現し

たのであろうか。
　本報告は、毛宗崗本における忠の表現の中から、とくに女性に関わる忠を検討することにより、演義における忠の表現の一端を明らかにする。たとえば、不意に訪れた劉備を供用するために妻の命を奪った劉安は、母への孝を優先して劉備に随従することはない。曹操に母を捕らえられた徐庶は、母への孝を尽くすため、劉備のもとを辞し、曹操のもとへと至る。しかし、母は徐庶の劉備への不忠を叱り、自ら命を絶つ。あるいは、姜叙の母は、姜叙と楊阜に馬超打倒計画に参加するよう熱心に奨め、最期は馬超を罵って殺される。さらに、趙昂の妻は、我が子を犠牲にしてまで忠のため、馬超と戦い抜いていく。
　毛宗崗本は、『李卓吾先生批評三国志』の記述を書き改め、新たに評を加えて、これら女性に関する忠の表現に、「漢への忠」という方向性を与えていく。たとえば、馬超を罵る姜叙の母の言葉は削除され、のちに蜀漢に仕えた馬超は擁護されている。毛宗崗本はこのような書き換えと評により、蜀漢を正統とする物語に相応しい忠を描いていくのである。

Ⅱ-10　〝清宮珍寶㾓美圖〟に関する報告
―とある『金瓶梅』挿画の背景と現時点での版本を中心に―

上　なつき（京都大学大学院）

　これまで中国家具史の論考、とりわけ明清期では、『金瓶梅』の文字情報と合わせて挿画を資料に使用することが多かった。その有用性は 1992 年にクレイグ・クルナスが既に指摘しており、その後、中国における明清家具についての文章では、何らかの形でこの小説を利用したものは多いことを、高井たかねが指摘している。
　よく援用される『金瓶梅』の挿画中、明代に制作された『金瓶梅』崇禎本の挿画は現在、日本でも出版されて流通し（瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成（四）金瓶梅/紅楼夢』）、その制作者や地域などの背景や出版事情を詳しく教えてくれる。一方、同じ『金瓶梅』の挿画〝清宮珍寶㾓美圖〟（以下〝清宮美圖〟）は、その背景を断片的にしか明らかにされていないように思われる。
　〝清宮美圖〟の個々の情報については、まずカーティス・エヴァーツが、この挿画のオリジナルセットには乾隆の印があり、制作されたのは 18 世紀初めから中期だと推定している。また藤原美樹らは「清宮皇子の教育用とされる清宮宮廷秘蔵」のものだとしている。両者による推定をもとにすれば〝清宮美圖〟は 18 世紀初め～中期の制作で、清の宮廷の所蔵だったと考えられる。
　今回は〝清宮美圖〟に関し、新たに陳崇海「昌平県档案館《金瓶梅》人物画集」の記事を検証し、挿画の鑑賞時代、その後に刊行された版などに関して情報整理を行う。そして、オリジナルのリプリント版と思われる京都工芸繊維大学、北海道大学所蔵の版の調査をもとに、エヴァーツらの推定した制作年代や場所を確認して、可能な限り、現時点での挿画に関する情報を纏め、報告を行うことにする。

Ⅱ-11　丁玲作品における同性愛―「暑假中」を中心に―

松倉　梨恵（慶應義塾大学大学院）

　丁玲（一九〇四～一九八六）は一九二七年の文壇デビュー以降の初期作品において、若い知識人女性の恋愛をめぐる物語を多く書いたが、そのなかには女性同性愛、あるいはそれに近い関係を描いた作品が存在する。「暑假中」（一九二八）は、女子師範学校を卒業した女性教師たち

の間の同性愛を描いた作品である。また「莎菲女士的日記」(一九二八)および「歳暮」(一九二九)における主人公と親友との関係は、「暑假中」におけるような恋人関係ではないものの、同性愛的である。

五四期以降、主に女学校における女学生同士の恋愛を描いた小説が、丁玲のほか、廬隠・凌叔華等により書かれている。これまでの研究では主に、これらの小説で描かれた女性同士の恋愛は「友情」であって「同性愛」ではないと見なされている。しかし、作品が発表された時期には、雑誌等のメディアにおいて西洋・日本からの性科学の紹介が進むとともに、「同性愛」という概念(中国語で「同性恋愛」「同性恋」「同性愛」)が受容され始めており、実際、女学校における同性愛の流行に関する文章等も増えている。そして、小説で描かれた女性同士の恋愛は、同時代のいくつかの評論において「同性愛」であると論じられている。それでは、当時「同性愛」という概念が受容されつつあるなかで、小説における女性同士の恋愛はどのように描かれ、どのように読まれたのであろうか。

本発表ではまず、『婦女雑誌』を中心に、同性愛についての論説と、読者からの投稿文で語られる女学校における経験談とに注目しつつ、当時の中国における同性愛をめぐる議論を分析する。その上で、丁玲の「暑假中」を中心に、作品を当時の時代背景のなかに位置づけて解釈し、作品の意義を検討する。

Ⅱ-12　「村上チルドレン」から「村上ファッション」へ、中国「70 後」・「80 後」作家群の変貌―衛慧、安妮宝貝、郭敬明の村上春樹受容を中心に―

徐　子怡(東京大学大学院)

中国において、専門誌『日本文学』(1986 年２月号)が最初に村上春樹(1949～)を紹介して以来、彼の長編小説『ノルウェイの森』及び『1Q84』三部作を中心に、1989、1998、2007、2010 の各年に計４回の村上ブームが起きている。2014 年６月までに刊行された中国語簡体字版の村上作品数は 48 点、版本数は百種類以上に達した。 こうして村上文学は中国の読者に時代と共に変化する日本社会を紹介しつつ、一種のファッションとして、改革開放以降の物があふれる豊かな生活を渇望する中国の若者たちの道標となった。そして現代中国文学・文化の青年層の担い手にも深い影響を与え、多分野において「村上春樹の模倣者たち」、いわゆる「村上チルドレン」(原文：Murakami’s Children・初出『タイム(〝TIME〞)』 2002・11)を誕生させるほど大きな影響力を発揮し続けている。

報告者はこれまで中国に広く厚く存在している村上チルドレンを主に 3 つのグループに分けて考察を進めてきた。本報告では、その第１グループである「模倣的創造の村上チルドレン流行作家」たち、すなわち現代中国文壇の「70 後」「80 後」作家の代表格である衛慧(ウェイ・ホイ、えいけい、1973～)、安妮宝貝(アンニー・パオペイ、Annie Baby、1974～)及び郭敬明(グゥオ・ジンミン、かくけいめい、1983～)の文学創作における村上受容を中心に、彼・彼女たちがそのデビュー初期の村上春樹に対する模倣性の強い創作行為から自己の作風確立の後に「脱村上チルドレン化」と移行していく過程を考察する。また、第１グループ作家群による作品の日本への逆流現象をも視野に入れたい。なお、第２グループの「成長中の村上チルドレン作家」と第３グループの「豆瓣網ユーザーとしての村上チルドレン愛読者」についての研究は、2012 年７月号の文芸誌『ユリイカ』で発表した。

Ⅱ-13　中韓両国における村上春樹文学翻訳版本の比較研究

―『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を中心に

権　彗(東京大学大学院)

1980 年代から村上春樹文学は中国と韓国に紹介され、のちに「村上ブーム」、「ハルキ旋風」などを引き起こし、「非常村上」や「ハルキ・シンドローム」などの流行語まで現れた。その人気はこの二十余年間とどまることなく、年々高まっている。2013 年４月、村上の長編小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(以下『色彩…』と略す)が日本で刊行されると、わずか７日間で販売部数 100 万部を突破した。中国と韓国でも『色彩…』は発売前から話題になり、激しい版権争奪戦を経て、韓国では二ヶ月後の６月に、中国では半年後の 10 月に訳本が出版された。外国の読者にとって訳本は村上文学世界に入る必須品であり、その翻訳に関する議論も絶えずに行われてきた。それは直訳か意訳かという宿命的な問題であり、村上文学の感性やその中に含まれる日本文化を如何に伝達するか、そして外国文化の輸入に際し、自国文化を如何に保全するか、あるいは変革すべきかという議論でもある。

本稿では最新の村上長編小説『色彩…』がいかに中国、韓国で翻訳され、受容されたかを比較分析し、中国語訳本(本稿では中国大陸の簡体字訳本のみ取り上げる)と韓国語訳本の特徴をまとめつつ比較し、中国と韓国の村上文学の受容状況を考察したい。具体的には、第一に 1980 年代から 2014 年現在までの中国と韓国での村上文学の出版状況を概観し、第二に、『色彩…』の流行の背景となる部分を取り上げる。それで、『色彩を持たない…』の一章を節単位に分け、ローレンス・ヴェヌティの「帰化」・「異化」翻訳理論を用いて、「直訳」・「書き換え」・「誤訳」・「漏れ訳」に分類し、中韓両訳本のそれぞれの特徴を分析し比較する。そして第三に両国語訳の特徴を中心に、両国における村上文学流行の文化的、社会的背景を比較考察したい。

Ⅱ-14　修練者(ノヴィス)としての少年

―郭敬明における岩井俊二『リリイ・シュシュのすべて』の受容を中心に

張　瑤(東京大学大学院)

岩井俊二(いわい　しゅんじ、一九六三年～)は一九九五年、最初の長編映画『ラヴレター』を監督し、独自な映像によりアジアで大人気を博し、現在中国でも著名な日本人映画監督・映像作家の一人である。郭敬明(かくけいめい、一九八三～)は「八〇後」(一九八〇年以後生まれ)作家群の代表の一人で、数多くのベストセラーを生み出し、若い読者からの絶大な支持を有しているばかりでなく、人気ムックの編集長や大手文化出版企業の出版人兼社長、さらに映画監督も務めており、さまざまな身分で多領域にわたって活躍している。

本稿は、二〇〇七年五月に出版され一週間で売り上げが一〇〇万冊を超えた郭敬明の長編小説『悲傷逆流成河』(邦訳『悲しみは逆流して河になる』、泉京鹿訳、講談社、二〇一一年六月)と岩井俊二の『リリイ・シュシュのすべて』(映画版・小説版)を取り上げて、イニシエーション・ストーリーの角度から両作品の異同点を比較検討し、作家本人の経歴や創作意義にも注目しながら、郭敬明文学における岩井俊二映画の受容について考察するものである。

具体的には、第一に、郭敬明が岩井俊二の映画『リリイ・シュシュのすべて』をまず中国語字幕版で鑑賞し、その後同作の中国語版を編集刊行したという二重の受容について検討し、郭敬明の『悲傷逆流成河』が岩井俊二の『リリイ・シュシュのすべて』から受けた深い影響を考察する。第二に、宗教学者 M・エリアーデの通過儀礼理論を援用しながら「残酷学園青春物語」とイニシエーション(通過儀礼)の関係に焦点を絞り、両作品における「死と再生」の儀礼的構造とその意味について分析する。最後に、両作家の死生観における継承関係を整理した上で、

それぞれの創作意図に焦点を当て、彼らが現代中国の若い読者に与える影響を考察したい。

Ⅱ-15　郭敬明と韓寒が代表する「八〇後」作家の映画進出について

楊　冠宵（東京大学大学院）

現在の中国において、最も人気のある若手作家は郭敬明と韓寒であると言えよう。二人とも1991年から始まった『萌芽』雑誌による新概念作文大会をきっかけに、学生でありながらいきなり単行本小説の出版に至り、今や文学創作活動のほか、映画製作にも活動の場を広げて爆発的な影響力を持ちつつある。

『中国文情報告（2012-2013）』によれば、2012年度最大のベストセラーは、莫言が同年ノーベル文学賞を受賞したにもかかわらず、郭敬明『小時代3.0』であり、彼の小説は同年度において３作もトップ20に入ったのである。郭敬明は2013年に、この小説『小時代』シリーズを自ら監督となって映画化し、その第一・第二部をほぼ同時公開して、興行収入が合計約8億円に達する好成績を収めた。同作は上海を舞台にし、仲良し４人組の女子が学生生活を送った後、社会人となる過程で経験する恋愛、友情、仕事、家族に関する様々な問題を描写するいっぽうで、高級ブランド品を全面にちりばめるなど極めてバブル的な雰囲気のゴージャスな青春映画である。

『小時代』が公開されてまもなく、翌年の2014年１月６日、「魯迅の再来」と呼ばれている韓寒がウェイボー（微博、中国版ツイッター）で映画監督デビュー作『後会無期（永遠にさよなら）』の製作および同作の同年７月24日上映予定を発表した。現時点では何人かの若者を主人公とするロードムービーの物語と推定されるのみだが、2010年の韓寒の問題小説『1988』との関係および、消費文化としての小説・映画を目指す郭敬明と対照的な立場にある韓寒の映画製作進出も興味深い。

本発表では、郭と韓という二人の対照的な流行作家が、自作小説の映画化によりどのような物語構造を展開しているのか、いかに映画により現代中国の若者の生き様を描いているのか、彼らの映画の観客層はどのような人々なのか、映画作品と観客との間にはどのような影響関係があるのか、などの考察を行いたい。

Ⅲ日本漢文部会

Ⅲ-１　唐『恵文太子集』の伝来について

劉　潔（九州大学大学院）

唐の恵文太子（？～七二六）は第五代皇帝睿宗の第四子で、同第三子玄宗李隆基（六八五～七六二）のすぐ下の弟にあたる人物である。もと李隆範、玄宗即位後は李範と改称した。武后期の混乱が終息し、睿宗が重祚するに及んで（景雲元年（七一〇））、岐王に封じられた。また先天二年（七一三）のクーデターの際は、いち早く玄宗側に味方し、太平公主一党の排除において武功も挙げている。

しかし、史料等に伝えられる彼の主な事績は「学を好み、書に巧み」で、多くの文章の士を愛し、「楽府の文雄」と呼ばれるように開元年間の長安における一大サロンを形成していたことである。少年時代の杜甫が名歌手李亀年を「岐王の宅裏に尋常に見」たことは周知の事実であろう。彼は開元十四年（七二六）四月に病薨し、恵文太子の賜号を追贈された。

ところで、彼の遺文集と思しき『恵文太子集』十巻が『日本国見在書目録』に著録されている。現在、中国の文献には一切記録が見えないこの詩集は、何時どのような経路で日本にもた

らされたのであろうか。さらに大江維時撰『千載佳句』には、この『恵文太子集』からの詩句が五聯(暮春・冬夜・三月三日・晴霽・送別)引用されている。これらは李範の詩句として現存唯一のものであり、その一部は後に藤原基経撰『新撰朗詠集』や近世の『続撰和漢朗詠集』にも収録されている。これらは『千載佳句』の影響を受けたためであろう。

本発表では、これら『千載佳句』に残る恵文太子の詩句を手懸かりに、李範の生涯、岐王宅のサロンに出入した唐詩人たちとその文学活動、それ以後に開花する盛唐詩壇に与えた影響等についての考察を報告したい。また、奈良時代の日本に『恵文太子集』が伝来した理由、一方、中国には同書が一切伝存しなかった理由についても可能な限り考証したい。

Ⅲ－２　黄庭堅抄物「演雅」の解釋について

大島絵莉香(名古屋大学大学院)

黄庭堅の日本受容は室町期の禪林で特に盛んであり、禪僧の萬里集九『帳中香』、月舟壽桂『山谷幻雲抄』(以下、『幻雲抄』と略す)、彭叔守仙『山谷詩集注』(以下、『米澤本』と略す)等、いくつかの抄物が現存している。また黄庭堅の詩の中でも「演雅」は特に、抄物中で「甲乙帳」(漢の武帝が珍寶をちりばめて作ったとされる帳)に相當すると高く評されること、この作品のみで獨立した抄物が存在すること、また句題和歌にも取り入れられたことからも注目度の高い作品であったことが伺える。

黄庭堅抄物の「演雅」解釋を踏まえた專論には、荒井健氏の「山谷の「演雅」の詩」(一九六九年／のち『秋風鬼雨』收録。一九八二年)があり、一韓智翊の『山谷詩集注抄』が中心に扱われている。この『山谷詩集注抄』は「演雅」の最終聯「江南野水碧於天、中有白鷗閑似我」の下の句を、「ココニ江南ノ水ノ清イ中ニ、白鷗カ人ニヘツラハテ、清閑ニシテ有ソ、是カ我カナリニ似タソ、」と解釋し、白鷗と山谷を同一視している。これに對して荒井氏は、「中に白鷗有り我よりも閑なり」と讀むべきであるという大膽な説をうち出した。

發表者は現在まで市立米澤圖書館藏『米澤本』の翻刻(「次韻王稚川客舍二首」二〇一二年、「詠史呈徐仲車」二〇一三年、「宿舊彭澤懷陶令(上)」二〇一三年、「演雅(上)」二〇一四年、『名古屋大學中國語學文學論集』第二十四～二十七輯)を行いつつ、『帳中香』・『幻雲抄』との校勘および考察を行ってきた。本發表では、荒井氏が主に據った一韓智翊『山谷詩集注抄』の他、『帳中香』、『幻雲抄』、『米澤本』を用いて「演雅」の最終聯を再考し、さらに三抄物間の説の襲沿について論じたい。

Ⅲ－３　森春濤の秋柳次韻詩

陳　文佳(名古屋大学大学院)

『春濤詩鈔』巻七「牛背英雄集」のうちに「秋柳四首用王漁洋韻」、また「疊韻」四首、全部八首の秋柳次韻詩が載っている。戊午の大獄の最中であったその時期、故郷の一宮に隠居生活を送っている春濤は初めてその作品の中に王漁洋詩を受容した痕跡が読み取れる。王漁洋の「秋柳四首」は彼の代表作として名高い作品だが、清朝では、漁洋と同時代の遺民詩人や後世の閩秀詩人らが数多くの唱和詩を作った。春濤もその詩韻を用いて和したのは、むろん漁洋の秋柳詩が相当気に入ったこともあり、自分の漢詩実力を世間に見せたいつもりもあったと考えられる。

春濤の秋柳次韻詩の主旨に関して、おそらく詩人の本意は故人を弔うことにあろう。安政三年十二月(1857.1)、春濤最初の妻服部氏が病没して、妻の死で衝撃を受けた春濤は数多くの悼亡詩を制作している。また、安政五年四月から安政の大獄が始まり、梁川星巌、梅田雲浜、吉田松陰らは全員捕縛の対象者となったため、本来上京しようと考えていた春濤は結局決行するに至らなかった。「秋柳四首用王漁洋韻」四首と「畳韻」四首は『詩経』、柳永の詞、また王漁洋や銭謙益らの詩を参考にしつつ、曖昧模糊な表現で秦淮のイメージを詠っている。春濤の和詩に不明瞭な詩語と複雑な多義性、また名状しがたい憂愁とが含まれるのは、漁洋の秋柳詩を積極的に学んだ結果というべきであろう。しかし、この八首の次韻詩の詩眼、また詩の中に使われている典故を解読すると、おそらく春濤は亡き妻への思いを詠うとともに、恩師・旧交たちの死を哀しむ心情も表していると考えられる。

Ⅲ-４　『和解女四書』における男女観について
―東アジアにおける女四書解釈との比較から

鬼頭　孝佳(名古屋大学大学院)

『和解女四書』とは幕末～明治初期に活躍した漢学者若江薫子(1835－1881)の著作であり、近世において女性儒学者の手になる稀有な女訓の一つである。ただし、この著作は若江の死後、昭憲皇太后の視察を記念して、1883年女子高等師範学校に頒布された刊本としてのみ現存しており、どの程度若江本来の意向を反映していたのかについては留保せざるを得ない。なお、本発表の底本は国立国会図書館本とする。本発表はこの著作について、資料紹介を行ったのち、男女の役割分担の観点から他の注釈との比較を行い、作者の現実との関係・同時代への影響について併せて考察するものである。

本発表ではまず、この本の基礎的な書誌事項について紹介した後、重野成齋の序や安達清風の例言の内容と本文との関係について言及する。

次に、『和解女四書』における男女の役割分担の記述に着目し、仮名草子『女四書』や『女四書芸文図絵』、朝鮮本『女四書諺解』(중간본 여사서언해)、清・王相『女四書箋註』などの東アジア諸国の『女四書』諸注との比較を試み、その解釈の共通性と差異について整理する。特に、女性が男性に行う「諫言」に着目する。この整理を通じて、『和解女四書』の内容を東アジアの文脈から考察することが可能となる。

そのうえで、随筆『杞憂独語』(梶原竹軒編『若江薫子と其遺書』所収)や若江の周辺人物の日記資料等を参照する。そして、若江が度重なる「諫言」により、「建白女」と呼ばれ、宮中を追われることになった一連の行動と『和解女四書』の理想とする女性像との整合性を検討し、若江の行動が単なる「時代錯誤」ではなかった可能性があることについて言及する。

最後に、以上を踏まえた上で、『和解女四書』が明治時代の男女観に与えた影響について付言する。具体的には女性の主体化に関わる法制・政治・教育への影響を検討する。

Ⅲ-５　『左氏会箋』における『左伝纘考』人物評の受容

竹内　航治(名古屋大学大学院)

本発表は、竹添進一郎『左氏会箋』が、亀井昭陽『左伝纘考』に見える人物評をいかに受容

したかを考察するものである。

『左氏会箋』は明治期に至るまでの『左伝』注釈の集大成と評価されており、同書が『左伝纘考』を多数引用することは先行研究ですでに指摘されている。この『左伝纘考』は、亀井昭陽が父・亀井南冥の『左伝考義』を受け継いで成した『左伝』注釈書であり、その内容は極めて詳細である。発表者は以前『左伝』隠公を範囲として、『左氏会箋』の『左伝纘考』受容を論じた際、竹添が『左伝』の登場人物に対して昭陽の人物評を引用しながら、一部書き換えを行った事例があることに気づいた。『左伝纘考』は鄭の荘公の行いを論じ、彼を「英主」と評する。『左氏会箋』はその注文を引き写しながら、荘公についてより広く行われていた評に従って「英主」を「奸雄」に改めているのである。

本発表では『左伝』全体に調査範囲を広げ、『左氏会箋』における『左伝纘考』人物評の引用や書き換えの状況を検討する。これを通して、昭陽と竹添が下す人物評価の基準について、その共通点と相違点を明らかにする。

なお『左氏会箋』のテキストは成本に拠るだけではなく、現存する数種の稿本も調査対象とする。これまで十分に研究されてこなかった稿本に着目することで、竹添が先行注釈書を受容しつつ自らの注釈を形成していった過程についても、具体例を提示しながら卑見を述べてみたい。

第一部　特別講演

大陸、日本語として

作家　リービ英雄

司会　藤井省三（東京大学）

講演者のリービ英雄氏は、作家・日本文学研究者。1950 年生まれ。プリンストン大学卒業。スタンフォード大学を経て、現在、法政大学国際文化学部教授。米国・台湾・香港・日本と幼少期より越境を繰り返した自身の体験に根ざした作品を発表。主な著書に『英訳 万葉集』（プリンストン大学出版社、1981 年、全米図書賞）、『星条旗の聞こえない部屋』（講談社、1992 年、野間文芸新人賞）、『天安門』（講談社、1996 年）、『千々にくだけて』（講談社、2005 年、大佛次郎賞）、『仮の水』（講談社、2008 年、伊藤整文学賞）など。近年は中国に関するルポルタージュ的な作品も多く、『我的中国』（岩波書店、2004 年）、『延安――革命聖地への旅』（岩波書店、2008 年）、『大陸へ――アメリカと中国の現在を日本語で書く』（岩波書店、2012 年）など、作家の視点から現在の中国を生々しく浮き彫りにする。例えば、『大陸へ』に記録された河南省の貧しい炭坑まちの姿。そこに暮らす人々のざわめきや息づかい、さらにはあたりをうっすらと蔽う闇の質量までもが読む者へと迫るかのようだ。紛れもなくここには「文学」の力がみなぎっている。本講演では、第二部のシンポジウムに先立って、作家の肉眼がとらえた生（なま）の中国像を提示する。

第二部　シンポジウム

中国とはなにか―言葉と権力

金　　文京（京都大学）

小島　毅　（東京大学）

濱田　麻矢（神戸大学）

司会　浅見　洋二（大阪大学）

今日の世界において中国は強烈なまでの存在感を示しつつある。中国が世界史の中心にふたたび躍り出たと言ってもいいだろう。それに伴って、国家レベルから個人レベルに至るまで、同時代の中国が孕むさまざまな問題が重要かつ切実なものとなって我々の前に突きつけられている。

中国哲学・思想史、中国文学、中国語学などを専攻するわれわれ日本中国学会会員の多くは、書物・文献のなかに表象された中国を研究対象としている。かかる視点から同時代の、現実の中国を見るとき、しばしば感じるのは「書物のなかの中国」と「現実の中国」とが示す微妙で複雑な、曰く言い難い関係性である。両者は一見すると遠く隔たっているかに見えるが、一方で時として意外なまでに近しい姿を見せる。いったい両者はどのように異なり、あるいは重なっているのか。また、そこからあらためて中国をとらえ返すときどのようなことが言えるのか。本シンポジウムでは四名のパネリストが、それぞれの研究分野の視点からふたつの中国像を比較・検討する。例えば、儒家の経典のなかに記された国家の規範、官僚文人の詩に表現された知識人と皇帝や民との関わり、戯曲・小説に描かれた庶民社会の諸相、あるいはまた近現代の文学に刻み込まれた国民国家の影、等々を手がかりにして。

ひとくちに「書物のなかの中国」と「現実の中国」と言っても、それぞれの中身は多様であり、したがってアプローチの仕方も多様でありうる。ここではあるひとつの問題視角を設定してみたい。すなわち「言葉と権力」。ここに言う「権力」とは、大小さまざまな権力を含む。皇帝や王の権力から、地域の有力者や家長の権力に至るまで。こうした実体を伴う権力のほかに、法や規範などより抽象的な権力も含めていいだろう。およそ人が社会生活を営むところ、つねに権力関係は生ずる。しかも権力は上から降りてくるだけではない。下からも、内からもやってくる。一方の「言葉」とは、皇帝や官僚が下す命令の言葉から、知識人や藝能者が操る高踏的・技巧的な言葉、さらには名も無き民が生活のなかで発する日常卑近な言葉に至るまで、やはりさまざまなものを含む。一般的に言葉は、多種多様な権力が織りなす社会的な関係性の網目のなかにあって生み出され、交換され、伝承されてゆく。その過程で言葉は、権力に対して時には迎合し時には抵抗するなど、さまざまな関係を取り結ぶ。言葉それ自体が権力と化すことすらあるだろう。本シンポジウムは、かかる権力と言葉の関係性という問題に即して中国なるものの特質を明らかにしようと試みる。

おそらくは討議を通して、安易な概括を許さぬ複雑で多面的な中国の姿が浮かびあがるであろう。善と悪、美と醜、公共と利己、ユートピアとディストピア、等々といった相反する要素がさまざまに錯綜して衝突・融合を繰り返すかのような。その多面体としての中国を、日本における中国学の問題としていかに受けとめてゆくべきなのか、われわれの中国学の未来を展望する場としたい。